

## 江戸の視覚の七不思議

田 中 優 子

江戸時代の映像、視覚文化には膨大な量があります。ですから私はどこに焦点をあてるのが一番江戸時代をわかることになるのか、いつも思い悩んでおります。それは例えば浮世絵だけ、ということでもないし、あるいは浮世絵以外の絵画だけということでもない。むしろ、他の生活文化の中にも大変優れたデザインがたくさんあります。私は江戸文化を研究していて、日々驚いています。

それからもう一つの特徴としては、外国のデザインや技術や色彩、素材などを常に取り入れられて、それをそのまま使うのではなく、江戸の中の商品文化に合った形に変えて作り変えて商品にしていく、そのような動きが見られます。これも生活文化の中に入っていくとなかなかわかりません。美術の分野の方は美術品を扱います。最近では漸く美術の分野の方が浮世絵も研究なさるようになってきましたけれど、ちょっと前までは浮世絵すらあまり研究されなかつたと聞いております。文学の分野ですと、これは

文字だけを対象とした学問です。しかし実際には江戸時代には、文学と言っているのかどうかかわからないような文学作品、つまり大量の絵を使った文学作品がありまして、これについて文だけではなく絵を説く、ということが、文学者たちの間ではあまりなされてきませんでした。書かれている文章だけを読む、という習慣になっております。そういうことから言いますと、江戸は研究が分断されている状況で、それぞれの分野でそれぞれを扱っているのだけれど、隙間がたくさんあるんですね。それを眺め渡すということがなかなかできません。私自身は江戸文学、近世文学の出身ですが、全体を眺め渡しながら江戸の視覚文化に一体どういうものがあった、それはどういう観点で見えたらいいのか、その切り口を作っているかと思っております。切り口にはいろいろあります。歴史家がやる江戸と、文学者がやる江戸と、美術史家がやる江戸とが違う。また生活文化の中では着物を扱う方々もいらつしやるわけですが、

そういう観点からの江戸も違うところを見ています。江戸文化全体を見渡すというのなかなか難しいですが、江戸文化の面白さは実は全体にある、とよく感じるんですね。

今日は七つという切り口を作りました。三という切り口、これもわかりやすいです。二、五、七というのがよく使われる切り口の数でして。これは江戸時代でいいますとその上には十二とか、三六とか、百とかいう数字が使われます。

江戸時代の文化は大変数字が好きでして、いくつかの数字を使いながら分類することがよくあります。七不思議という言葉もあります。七福神という言葉もあります。そのように七という数字はよく使われます。それになぞらえまして今日は七にしたのです。

一つ目は浮世絵の話題です。浮世絵も全部を見てしまうと、何がどうなのかわからない。つまり一人一人の浮世絵師もとても個性的ですし、浮世絵というのは様々な視覚的な実験をしています。ご存じのように彫り師、摺り師の技術が大変高度になります。歌麿でピークに達しますけれども、だからといってピークに達した技術に頼っているのかと思うとそうではなくて、そういうものにほとんど関係のない写楽のような人も出てくる。そのような世界ですから、浮世絵の歴史は大変面白い。それぞれ勉強なさることによって、かなりのことがおわかりになるかと思えます。

今日は浮世絵を見渡す、というのではなく、まず「名所江戸百景」を使って浮世絵の中の視覚の特徴を取り出してみようと思えます。浮世絵の視覚の特徴はもちろん他にもあるんです。しかし「名所江戸百景」は幕末に現れ、まさに浮世絵の歴史に大きな問題提起をしたと言っていると思います。この面白さに気がついて取り入れたのがフランスの印象派絵画です。例えばトリミングに特徴があります。何故そういうものが出てきたのか、いろいろ説明されていますが、本当に納得できるような説明はまだありません。浮世絵の歴史そのものが持ち続けてきた特徴なのではないかと思っています。

二つ目は遠近法とレンズで見た江戸です。私が英文学者の高山宏氏と共訳しましたタイモン・スクリーチ (Timon Schech) 氏の『大江戸視覚革命』という本があります。これは翻訳題でして、「江戸時代後期における視覚の変化」という原題を持っています。このタイモン・スクリーチ氏が問題提起したことは何かと言いますと、江戸文化は非常にたくさんレンズを使って作られていますよ、ということなんです。もちろんそれだけでなく、遠近法やからくりや歯車の、さまざまな西欧文化との接点についても、論じたものなんです。この本は従来とは違って、大衆文化の中に西洋文化があったのだ、という視点を持っている。例

えば大道芸の中に西洋文化があった。大道の屋台で、レンズを通して絵を見せるという、そういうことがあった。それを中心にして戯作の中にレンズから見た世界が作られていく。まさに大衆文化の中で海外文化が花開いていく、ということに気づかせてくれたのがタイモン・スクリーチ氏の本です。外国の方たちがずいぶん日本文化研究をするようになったんですが、それは従来のように『源氏物語』を翻訳して論じる、というような、もう古典とされている分野を見るというだけではなく、大衆文化を見るようになってきたんですね。非常に画期的な本だったと思います。そのような、私がタイモン・スクリーチ氏から教わったことも含めて、レンズと江戸文化との関係を見ようと思います。

三つ目は絵と文字の関係、というテーマです。これは私が以前から大変気になっていたものなのです。江戸文化だけでは無いと思いますが、絵が文字に見えますし、文字が絵に見えるんです。この二つが判然と区別できなかったり、あえて一緒にしてしまう、という傾向があります。その結果、活字で始まった出版界が変化していきます。日本は活字で出版が始まります。ところが活字を使い切れなくなってきました。何故活字が日本から消えていくのかということについては、政治的な理由その他諸々の説明がなされませんが、実はこういう要素が一番大きかったのではないかと

字と絵の融合関係が非常に強いということが大きかったのではないかと、思っていますので、それをお話します。

四つ目はパロディということですが、江戸文化の本質中の本質です。パロディということは、笑うということなんです。元がなくてただのお笑いというのはパロディではありません。元がある。そうしますと、江戸文化は何か元を使っているんですが、それは平安時代の文化なんです。そしてもう一つは中国の古典です。こういう元になる古典を使ってそれを笑うわけですね。どうやってひねったらおかしいか、どうやったらからかえるか。それを膨大な量作っていきます。それが商品になっていきます。これはパロディというだけではなく、デザインにしていこうということでもあるんです。

そしてこれは今言ったことと関連ありますが、五つ目は目で見る文学です。今申し上げたことと同じです。古典文学をデザイン化するという、大変特徴的な手法があります。このために江戸時代の経済は活性化したのではないかとと思われるくらい、商品アイテムに反映されていきます。ですから江戸時代の文化は古典と外国文化を非常に頻繁にネタとして使いました。新しいものを創造していく、という傾向があります。これはどんな分野でも見られることな

ので、例えば今申し上げたことを、歌舞伎なら歌舞伎一つで説明ができるくらいなんです。今日は長くなりますので歌舞伎の話はしません、歌舞伎には例えば「世界」という考え方がありまして、これは基本ストーリーのことなんです。基本ストーリーを「平家物語の世界」とか「太平記の世界」とかそういう言い方をします。これらは古典です。一つ前の中世の時代にでき上がったものですが、これが古典だということになっていまして、この古典を使って、まさに今生きている人たちと一緒に出現させる。助六が典型的です。助六の場合には「曾我物語の世界」というものを使いまして、曾我五郎という江戸時代から見れば五〇〇年前にもう死んでいるはずの人なんです、その人がなぜか舞台に出てきて助六の格好をして、自分は助六だと言っているわけです。すごく変な構造ですね。ああいうものが、つまり江戸時代のパロディです。もう死んでいるはずなのに目の前に出てきてしまう。しかもその人は現代人と同じ格好をしている。逆に言いますと自分の目の前にいる、同時代人だと思っている人がそうじゃないかもしれないという感覚に陥ってしまうわけです。歌舞伎はそのような構造を元々持っています。ご存じのように忠臣蔵の物語は太平記によって作られています。四谷怪談は忠臣蔵によって作られています。というように、元のないものはないという

くらいです。そして新しい商品です。歌舞伎というのは商品です。今と違って毎年新しい商品が作られています。今は、従来の演目を何度も繰り返してやっていますが、江戸時代の歌舞伎は毎年新しい商品を作っていくわけなんです。江戸時代の、新しい商品の作り方の秘訣は、元を使って新しいものを生み出すというやり方です。これはあらゆる江戸時代の社会に見られることです。それが創造性ということの意味でした。そういうようなことがデザインの中にもあるというのが五つ目の話です。

六つ目は着物です。着物というこの一つのアイテムだけで江戸時代の価値観から技術までさまざまなことが浮かび上がってきます。私は着物というテーマで江戸時代のリサイクルとか環境問題の話をすることもあります。それくらい着物というテーマは深い価値観を伴うテーマを持っています。今日はビジュアルの文化・目で見る文化が中心となっていて、着物ができ上がっていく課程でどのように新しいファッションを作り出していったのか、をお話します。着物は古典を使うと同時に外国の文化を使う。外国から入ってくる情報を使うわけですが、着物がそうやって作られていた。これも商品ですよ。そういうような話です。

それから七つ目。これも着物の話なんです、今申し上

げたように外から入ってくるものを使うのですが、ではそれでおしまいなのか、外国がぶれなのかというところではない。という話です。着物を見てみますと世界中どこを探してもない側面が着物の中にあります。それが「風景」という問題です。着物を広げると風景になるんです。これが非常に不思議なもので、布でそういうような世界を構築しているということ自体が、大変珍しい。その風景の作り方、デザインの仕方が、着物の中に入って歩いて歩けるほど風景そのものになっている。そのようなデザインを着物は元々持つていました。今の着物はそうなっていません。何故かと言いますと、多くても一年に一回しか着ない。人によつては、それこそ一生に一枚しかお買いにならない。そうしますと春だけの着物を買おうと秋には着られないわけですから。そこで一枚の着物の中に、全部の季節を入れてしまっているんですね。それが今の着物の作り方です。そうすると風景は成り立たなくなるんです。江戸時代の着物で申し上げられることは、今は実現されておりません。しかし江戸時代の着物は風景という考え方と非常に密接な考え方があります。

「名所江戸百景」です。これは一〇〇枚以上のシリーズです。

日本橋です。左右が切れているような気がしてしまうと

というのがこの絵なんです。実は切れてないんです。これは「日本橋江戸ばし」という題名です。手前が日本橋で、向こう側に江戸橋が見えるんです。この景色で、日本橋のどこにいるのが江戸の人にはすぐわかります。そうしますと右側にちよつと見えている網が何なのか、その次にわかつてくるわけなんです。何でしょう？魚屋さんのかつぐ桶の網ですね。この桶の中に、魚が入っています。この魚は何でしょう？それがわかるだけで、季節がわかります。日にちもわかります。時間がわかります。そう鯉ですね。初鯉です。

この魚屋さん、今どちらの方向へ動いているのでしょうか。江戸橋が見えるので、向かって左側に魚市場があるんです。ですから左から出てきて、走るように右に歩いていったわけです。魚屋さんが早足で目の前を通り過ぎていったその瞬間だ、ということがわかるわけですね。夕焼けもしくは朝焼けが見えます。魚屋さんですから当然、朝焼けです。そしてこれは初鯉の季節、初夏の或る日、ということもわかります。そうしますとこの絵は、二次元的な空間なんですけれども、それ以上の情報がある。季節がわかる、風が薫るその感覚もわかる。時間もわかる。そして動きがわかりますね。登場人物の動きがわかります。このように時間や季節という情報が入っているんです。

【吾妻橋金龍山遠望】です。これもばつさり切れています。向かつて一番左側に女性がいる、でも女性の後ろのほんのちよつとしか描いていない。それからなんと船の後ろの方もカットしてしまつてゐる。でもその後ろの合間から見えるのが浅草寺と富士山とそして桜です。桜が散つてゐます。というふうに考えると、江戸から見ると富士山は西です。西が赤い色になつてゐるといふことはもう時刻も夕方ということがわかります。そして船。右の方から左に向かつて動いていく。つまり隅田川を浅草寺から反対側の方に動いてゐる、という風景であることがわかります。深川に向かつてゐるのかもしれない。深川の芸者かもしれない。

【はねたのわたし弁天の社】これはご存知のかたも多いと思いますが、羽田沖を描いた絵なんです。これは私は見るたびに自分が船に乗つてゐるような気持ちになるんです。ヨーロッパでは大衆これは批判的に受け止められたといふ。汚い、腰がみえるじゃないかと。本当に腰毛がとでも一本一本丁寧に描いてあるような絵ですが。船頭さんの腰毛が見える。ぎーこぎーこと音が開こえてくる、これは臭いまでしてきそうだという人もいます。その船の中から見た情景です。この場合の動きというのは自分が船に乗つていて船が動いていく、そういう動きです。

【月の卿】これは動きというよりも時間の経過を描いた絵です。誰もいませんよ。誰もいないようなお座敷を何で描くのだ、と思つてしまふ、とても不思議な絵です。しかし右下を見るとお箸が廊下に置いてあつて、お酒を入れていたらしい銚子が見える。それからお座敷をよく見ると煙草入れだとか杯洗が散らばつてゐる。そうしてずうつと右の方を見ていくと女の人の後ろ姿らしいものがちらりと見える。こんどは左の方を見ていくと遊女の影がちらつと見えます。それだけであとは月が真ん中にはーんとあります。実に開放的などとも気持ちのいい浮世絵だと思ひます。細かくひとつずつ、何が置いてあるかを見ていくと、これがどういふ時間なのかわかります。宴会の後、というのが伝わってきます。ドンちゃん騒ぎしてたんだらうな、直前まで三味線の音がしてたんだらうな、と思ひます。煙草入れがありますのでお客さんはまだ帰つてない。どこへ行つたんだらう、なんていうふうな想像するわけですが、たぶん海岸に出ているんじゃないかな、また戻つてくるのだらうと。そういう時間の経過を感じます。

【四谷内藤新宿】新宿です。馬がいて、馬の足のところから向こうを見るつていうのもまたすごいです。それから馬子がいるようです。宿場町です。今度は馬の動きが見えて、馬糞がちゃんと描いてあります。糞をしながら歩いて

いるという、生々しい歩きがよく見えます。

〔深川洲崎十万坪〕これも私は大好きな絵です。江戸の都市というのはヨーロッパの都市のような建築物のモニュメントがありません。江戸の都市の印は何か、これが出てくると江戸だ、とわかるのは何かと言うと、富士山と筑波山なんです。富士山は何度も出てきます。ここに見えるのは筑波山です。筑波山を見はるかした深川の木場の様子なんです。雪が降っていて、真つ白な素晴らしい絵です。鷺が首を下に向けています。ということは何か小動物を見つけた瞬間なのではないかと思えます。次の瞬間、何をするか、おわかりになりますね。下に向かって急降下するはず。その直前です。方向を変えて羽を整えているところ。これを見るたびに私の目には、急降下している鷺の姿が見えてくるんです。

〔浅草田圃西の町詣〕私がとても好きな作品です。西の市の目の吉原ということがわかります。浅草田圃という題名になっていて、よく見ますと、猫が何かを見ている。猫の視線の先を追うと、人がぎつしり歩いていきます。何人が尖ったものを持っているのが見えます。西の市で売っている熊手です。それを持った人がずらりと並んで歩いていく。熊手を持って戻ってくる人がいて、熊手はまだ持っていない人が、鷺神社に向かっていて。そういう人々の波が

見えるんです。その周りには何も人影が見えない、ここは田圃なんです。しかし手前に暖かそうな、懐かしい家の明かりが見えます。富士山がありますのでこちらが西であることがわかります。夕焼けですから雁が帰ってきていますね。雁の群れが帰ってくる時間、夕暮れの、皆が家に帰りたくなる時間で、西の市ですから十一月一日です。もう寒いんですよ。寒い季節の夕方に人家の明かりが見えて、猫が丸まっている、とても暖かい雰囲気がある。そして遠くからかすかに、ざわざわと声が聞こえてくる、という風景なんです。もう一つ面白いのが、猫のそばに手ぬぐいがある、湯飲み茶碗か、杯洗が見えます。そしてさらに手前を見ますと簪が見えます。この簪が熊手の形をしているんです。そして浮世絵の枠の最も端のところに黒い縦すじが見える。これは絵の一部なんです。何でしょうか？実は屏風の裏なんです。わざわざ屏風の裏をここに描いています、そして屏風の向こう側に簪が見えていて、一本だけ外されています。ここに何か見えます。紙の束です。屏風の向こうにはたぶん、お布団が敷いてあるんでしょう。西の市に行つて、遊女のために簪を買ってきたお客さんがいるのでしよう、ということがわかってきます。この絵の中にはぬくもりがいくつもあります。隠されたぬくもり、寒い季節のぬくもりです。そうやって一つ一つの小道具が、

絵全体を抜け出して、想像力を膨らませていくための小道具になっていくんですね。それが空間であると同時に時間であり、季節であり、ぬくもりであり、さまざまな都市生活のシンボルになっていることがおわかりになると思います。

【「鎧の渡し小網町」小網町です。今はこういう水はありません。この「名所江戸百景」というシリーズは八〇%に必ず水が見えます。これは海であったり、隅田川のような川であったり、さまざまな水なんです。この風景は江戸の中に縦横に走っていた運河なんです。運河はほとんど今、埋められています。もちろん日本橋小網町も埋められています。この場合もそうですがほとんどの場合、今は上に高速道路がかかっています。川の上には何故か高速道路が通りますね。これは渡しなんです。そしてこの一隻の船の触先のところが大胆に切れています。そして女の人も三分の一は切れています。しかしトリミングすることによって、その動きが見えるのです。歳がずらつと並んでいるので、この絵が遠近法だということがお気づきでしょう。江戸時代、遠近法は非常に長い間使っています。この絵は幕末です。遠近法を使い始めて一三〇年はたっていると、いいと思います。

【「高輪うしまち」品川の海です。これは「名所江戸百景」

です。つまり「名所」のはずなんです。本当に何気ない海辺を描いている。犬が二匹いて、西瓜の皮や草鞋の使われなくなつたのが捨てられている、これが名所だ、というのがいいですよ。

牛車もあります。荷物を運ぶときだけ使ってもいいことになっているのです。人を運ぶものではありません。荷物運びの牛車が、たぶん捨てられているのではないかと思うのです。牛車の曲線に合わせて虹が出ています。ここがいいですよ。日常の何気ない、ちょっと考えるところみだらけという風景の中に虹が出ている。それだけで江戸では「名所」になるのです。

さて、ここからは違う話題をします。今の小網町の絵で、遠近法がもう百年くらい続いています、という話をしました。遠近法は、江戸時代の浮世絵がまだカラー印刷技術のない、色を付ける時には手で塗っていた時代からよく使われています。江戸時代の遠近法が頻繁に使われたのは、歌舞伎の劇場や遊郭を描く時です。歌舞伎劇場の絵の場合、舞台はもちろんですが、客席もちゃんと入れるというのが描き方の特徴で、客が沸いて、舞台と役者が一体になっているその興奮こそが、芝居絵として描かれていたのです。

芝居絵といいますと役者絵を思い出されるでしょう。役者



絵もあります。実は芝居劇場の情景を描いた絵がとても多く、役者よりお客さんの方が面白い、というのが特徴なんです。裸になってけんかをしている男の人だとか、デートしているカッパルだとか、いろんな人が見えます。芝居絵をご覧になる時はぜひ、お客さんを見て下さい。「芝居狂言浮絵根元・忠臣蔵」

【浮絵歌舞伎人芝居図】もつと幕末に近づいてからの芝居絵です。遠近法もいろいろな描き方があるのです。客席の賑わいを表現すると同時に、舞台構造を描く。この時代になりますと舞台の構造が違っています。能舞台のような屋根はなくなつて、花道ができています。『暫』という演目をやっています。そしてなんと、上部にずらりと提燈が並べられています。こういう劇場の華やかさも描くようになっていきます。

【吉原伸之町】遠近法の浮世絵のことを「浮絵」といいます。浮いて見えるからです。その「浮絵」が始まつてすぐの作品です。この場合は遊郭を描いています。遊郭は大門を入りますと真ん中に伸之町という道がまつすぐ続いているんですが、その賑わいを描いたものです。

【浮絵駿河町呉服屋図】ちよつと変わっているのは、遠近法でお店の中を描く、ということがあるんですね。三井越後屋の中を描いています。ぎっしりお客さんがいる、と

いうのがわかります。これはたぶん越後屋さんの注文でしょう、実際はこうじゃなかったんじゃないかと思いますが。上の方に着物が下がっています。実は越後屋さんのような呉服屋さんには着物を売っているのではないんです。反物を売っているんです。ですからここに下げられている着物は注文で出来上がったものが下げられているのではないかと思ひます。やはり、お客さんを描きたい、というのがどうも浮絵の動機にあるような気がします。

【隅田川料亭】浮絵がどうやって出現したのかを、表す絵です。中国には遠近法を使つた絵が非常にたくさんあります。ヨーロッパの影響を受けて、中国で始まつたものなんです。こういうものが中国で描かれるようになると、日本でそれを取り入れて描かれるようになります。これは隅田川の遊びの場面を描いた初期の頃の遠近法です。そのようにしてヨーロッパの遠近法は中国を経由して日本に入ってきました。しかし画家、襖を描いたり屏風を描いたりする狩野派のような画家たちは、遠近法は使いません。浮世絵師だけが使います。浮世絵師は權威主義者ではなく商人だからです。外から入つてこようと、誰が持つてこようと、面白いものは面白いじゃないか、ということ。浮世絵は商品だからです。そういう発想の基に、浮世絵師たちは頻繁に遠近法を使いました。

【鈴木春重の浮絵】遠近法の絵です。美人画と組み合わせるといふことも出てきます。浮世絵をご存じの方はよく知っていらつしやるかと思いますが、鈴木春信という浮世絵師がいます。この人の下絵による浮世絵が印刷ですべての色彩を出せるようになった最初のものなんです。そうしますと春信の浮世絵を真似る人たちが出てきます。これは春信の浮世絵の贋物です。春信は遠近法を使わないんです。でもこの人は遠近法を使って春信風の美人と組み合わせています。そしてこの絵を描いた人は鈴木春重と自分で勝手に名乗って、春重とサインしてある時と、春信とサインしている時があつて、完全に贋作絵師だつたと思うんです。

【両国橋】ところがこの鈴木春重は次に、すごいことをしました。銅版画の開発です。これはアジアで初めてアジア人の手によって作られた銅版画です。今微妙な言い方をしましたが、アジアに銅版画がなかった、という言い方はしません。中国には銅版画がたくさん残っています。ただしそれはヨーロッパ人の手によって作られたものなんです。日本にも、オランダ東インド会社が持つてきますので、ヨーロッパ人の手によって作られた銅版画が存在しています。それが同時に日本人が自ら作った銅版画が出現したのです。それがこれなんです。一七八三年作成です。銅版

画では鈴木春重という名ではなくて、司馬江漢という名前になるわけです。この司馬江漢すなわち元贋作絵師・鈴木春重が描いた「両国橋」です。よく見ますとたくさん人がいます。歩いていて葦簀張りの店が見えます。銅版画の特徴は、空に微細な筋が入っていることです。こういう細かい筋を入れることによって雲を表現したり、物や人間に影をつけるのです。浮世絵ではほとんどやらないことです。建物を立体的に見せるために影の部分と明るい部分とを強調します。これを陰影法というのですが、こういうような技法がヨーロッパ絵画の特徴です。その技法を取り入れてでき上がった銅版画です。しかしこれがヨーロッパ的なパースペクティブだ、ということは何かで示さなければわかってくれないと思つたのか、上部にリボンとアルファベツトを入れています。何と書いてあるのでしょうか。オランダ語で「Two Lands Bridge」という意味のことを書いてあります。つまり「両国橋」です。正しい表現だと思ひます。確かにそういう意味ですから。

【日本堤】隅田川べりです。堤を歩いている人たちです。影がくつきり見えます。先ほどの絵でも、この絵でもおわかりだと思ひますが、人間が八頭身どころか、十頭身くらいです。これが日本人か、と思うようなプロポーションですが、そのような意味でも、日本画や浮世絵にはない雰囲気

気を持ちます。この水の描き方も、それまでの浮世絵とは全く違う。細かい線を出すことができるために、波も立体的に描かれています。こういうエッチングが、日本人の手によって描かれました。

【紅毛雑話】一七八〇年代の江戸は、博物図鑑がヨーロッパからたくさん入ってきました、それを見る人や写す人、そういうことに関心のある人が多くなります。昆虫や鳥や植物などに大変関心を持ちます。学者の中にもそういうものに関心を持つ人が出てきます。西洋医学、とくにポルトガル医学とオランダ医学は、江戸時代はかなり早い時期から、幕府の中にきちんと位置づけられていました。幕医には最初は南ヨーロッパ系の南蛮医がいました。しばらくたちますと北ヨーロッパ系のオランダ医学の医者たちが桂川家という一つの家を成してまして、そういう人たちが幕府の医者を務めています。ですから江戸時代が鎖国で、ヨーロッパ文化を排斥していたというふうな思っています。その結果なんです、桂川家の一人の人物、森島中良がよくこういう本を作っていました。これらは顕微鏡で見た昆虫図です。

【松梅竹取談】なんとこれを気に入ってしまった山東京伝という戯作者がいるんですが、顕微鏡で見た蚊とか虱、

蚤、ゲジゲジ等を取り入れまして、顕微鏡で見たら大きくなってしまった、人間よりも大きくなってしまった、というSFを書いたんです。人間が大きくなってしまった昆虫たちに襲われているところです。これはつまり、レンズがもたらした世界ですね。レンズで見ると大きくなっている、それを、「実際に大きくなる」と読み替える。これはもちろん冗談だ、ということはおわかってはいるわけですが、この冗談を使ったSF作品が出てくるんですね。

【栄増眼鏡恋】これは現実にはありません。眼鏡屋です。君子の眼鏡とか美人眼鏡とか書いてありますから、ほんとか、とも思うんですが、とにかくいろいろな眼鏡を売っていて、望遠鏡や顕微鏡も売っていた。眼鏡屋が存在したのは本当です。この絵は冗談なんです、ある眼鏡をかけた家が広くなってしまった。レンズの効果です。

【福徳寿五色目鏡 夢】ある眼鏡をかけて寝ると、好きな夢が見られる、という眼鏡です。これありそうですね。

【福徳寿五色目鏡 遠方】これは未来予測だと思えます。ある眼鏡をかけると、遠くにいる人物が見える。遠くにいるはずの友達が、ふざけているのが見えているんですね。こちらの人は相撲が好きで、眼鏡をかけたら相撲をやっている風景が見える。相撲中継ですね。この人が眼鏡をかけたら、富士山を歩いている友人たちが見える、と。これテ

レビですよ。テレビの出現を予想していたのではないか。これらのジャンルは黄表紙と呼ばれるジャンルです。すべてが絵になっているんです。間に文字を入れることによって、せりふを表現したり、物語を表現したりするんです。

いつもおかしな内容なんです。つまりまともではない、いつも不思議なことが起こってしまう世界なんです。ですから私は黄表紙を「SF漫画」と呼んでいます。そのようなジャンルの中に、当時本当に街の中にあつた眼鏡屋ですとか、望遠鏡とか顕微鏡とかが登場する。レンズは面白いなあ、彼らは思っている。

そしてレンズは大道にも出現します。本当にこういうものがありました。レンズを覗くんです。そうすると中に絵が入っています。日本の絵である場合と、ヨーロッパの都市が描かれている場合と両方あります。遠近法で描かれていて、レンズを通して覗くともっと遠近感が強くなる。後ろの方で光の調節をしますと、昼間の情景が突然夜の情景になったりする、そういうこともできるんです。

【御存商売物】子どもが覗いていますね。呼び込みをするためにろくろ首をおいています、それが邪魔なんです。その後ろの絵をよく見ますと、遠近法でヨーロッパの都市図が描かれているのに気づきます。ヨーロッパ人がいまして、犬がつながれています。日本では犬をつながない

んです。ですからこれがヨーロッパの都市の象徴のようになっています。ヨーロッパの建物が見えますね。それで「こういうものが中にあるよ」と呼び込みをして、お金を取って子どもたちに見せています。

このような覗き眼鏡は、当時同じようにヨーロッパでも大道で使われていました。司馬江漢は携帯用の覗き眼鏡を持って、各地を歩いて人々に見せていました。

【清水の舞台から飛び降りる美人】これは私が『江戸の想像力』という本の表紙に使つた春信の浮世絵です。何故これを今お見せしているかと申しますと、次のテーマの「絵と文字」に関連しています。

これはカレンダー、つまり絵暦なんです。この中に文字が入っています。なかなか見つかりませんが、例えば傘が出てくると傘のまわりのところに文字を入れている、もう一つの入れ方としては着物の襷のところに入れる、というやり方があります。このようなものがカレンダーだと言われても困ってしまうんですが、当時絵暦と呼ばれるカレンダーは、なんと絵の中に文字や数字を隠すんです。カレンダーというのは普通文字や数字をはっきり見せて、だからカレンダーの役割が果たせるんですが、見えないように隠す。このような絵で表現したカレンダーの開発をしていく過程で、すべての色彩を印刷できるようにした。いわ

ゆる「錦絵」の技術ができ上がったんです。

【桜立木文様小袖】今のカレンダーはたとえ写真入りのカレンダーであっても、写真と文字が別々になっっています。しかし当時の絵暦は、絵の中に数字を入れてしまうことが非常に多い。その考え方はもともとあったのではないかと、と思います。例えば着物なのですが、桜の着物でして、裾から桜の木が生え、花が咲いています。さらに上の方へいきますと文字が咲いているんですね。「春」と「始」という文字とが見えます。これは着物の後ろ身頃ですが、前身頃にも文字が散らされています。これらの文字を見ますと、『和漢朗詠集』の中の漢詩が浮かび上がってくる。ところが全部の文字はないんですね。だいたい前後ろ両方で六文字くらいしかないんです。その六文字から『和漢朗詠集』の漢詩を当てよ、というクイズみたいなものなんです。このような、着物の中に文字を入れる、という考え方があります。ついでに言いますと、これは生命樹という世界全体で共有している文様の一つです。生命樹というのは布の中に一本の木を置きまして、それで世界が成り立っている、というのを表現するものです。

【『伊勢物語』を下絵にした梵字経】このようなことはもつと時代が遡りますと、例えばお経なんです、梵字で書いてあります。お経を印刷する時に基礎となる紙そのもの

に絵を描いて、そしてお経を印刷する。あるいは逆のこともおこります。絵を印刷しておいて、文字を手で書く、というのがあります。その両方が出現するのです。このような紙を料紙といいます。料紙というのも考えてみればすごく不思議なものです。文字を書くためにあるのですが、必ず絵が描いてある。

【煙草恋中立】先ほどお話しした黄表紙に近づいていきます。活字で始まった日本の出版。活字を民間の業者が印刷に取り入れて、江戸時代のごく初期一六〇八年頃、京都で出版業がおこります。活字はどういう文字を使うかと申しますと、最初は漢字だけです。その次にはひらがなの活字も出てきます。普通考えたとそれはきつとたくさん本を作るためだろうと思いますし、そのままずっと活字だけで出版されていく、と思うんですが、日本の場合はそうはなりません。活字を使った出版の時代はほんのわずかで消え去ってしまいました、その後出現したのが版木による出版です。版木による出版によって、何が可能になるかと言いますと、一番大きな要素は絵なんです。一枚の桜の板で一ページ分を彫ります。活字ではないので、文字を彫る時にこういう、ほとんどが絵ででき上がっている頁を彫ることができます。たとえば「黒本」と呼ばれる子ども向きの本です。煙管と煙草が争っている、という絵です。文字

量が少ないです。

文字量が多くなつて、大人向けの黄表紙というものに変化していくのですが、活字ではこれができないんです。活字の場合、たとえばヨーロッパの本では挿絵を入れる時にどうするかと言いますと、別のページに入れる。よほど一緒にしたい時には、一ページの中でも枠を別にして組み合わせてみせます。活字と版木の違いは、スペースの空き方によつて文字の大きさをどういうふうにも調節できる、という点です。江戸の人たちは絵と文字を一緒にしたい、という願望が非常に強い。活字の時代が短かつたのはそういう理由なのではないか、と私は思っています。

〔金々先生栄花夢〕黄表紙です。先ほどの煙管の黒本に對して、大人向きに作られている本です。ある青年が田舎から出てきます。江戸に出て来さえすれば出世できるのではないか、と考えたからです。出世というのはこの場合お金持ちになることです。そういう夢を抱いて出てきた。夢の中で実際、努力無しに金持ちになつたのですが、結局つまらなくなつて帰つてしまつた。

この話はどこかで聞いたことがありますよね。〔邯鄲〕という能および、中国の物語があります。盧生という中国人の青年が、科擧の試験を受けるために長安をめざし、途中の邯鄲という都市に着きます。ところが、昼食をとろうと

思つて粟が炊けている間に夢を見た。その中で皇帝にまで上りつめる。皇帝になるつてこういうことなのか、とむなしく思い、その野望を捨てて田舎に歸つてしまふのです。中国のお話を黄表紙にしたのです。しかし、ただ中国の話を黄表紙にしたのではありません。このように田舎から出てきて江戸で一旗あげたい、という青年たちが、實際この時代とても多かつたんです。ですからその現実も反映しています。黄表紙というのは、現実を反映するということと、フィクションとが一体化しているんです。

〔画本虫撰〕文字と絵ということでもう一例挙げますと、これは歌麿の『画本虫撰』です。もともとこういう絵は花鳥画といひまして、掛け軸で描いたり、屏風絵になつていたり、襖で描かれたりしてました。ところがこういう花鳥画の領域のものも浮世絵師たちが描くようになります。歌麿の場合はこれでデビューするわけですから、その技量の素晴らしさがまずこの『画本虫撰』に見えます。昆虫や花を詳細にリアルに描いています。こういう博物画によつて歌麿は世の中に出てきます。屏風でもない、絵巻でもない、襖でもない、本の形になつてこのようなものが登場しているというのが江戸文化の一つの特徴です。つまり出版されている。印刷されている。これは印刷物で、しかも一冊の本として全部カラー印刷になつていきます。しかし絵だ

けで本が出るということはないんです。必ず文字がある。この本には狂歌が入っています。大変有名な狂歌師たちの狂歌を二首ずつ入れて構成したのが『画本虫撰』という浮世絵で、これによつて歌麿はデビュウするんですね。つまり本を美術として見ることもできるし、文学として見ることもできる。絵と文字が一緒になつた媒体こそが江戸時代にとつての本なんです。狂歌師たちは有名な人でした。大変有名な狂歌師たちを集めて、全く無名の喜多川歌麿という絵師をデビュウさせた。仕掛けたのは爲屋重三郎です。

【隅田川兩岸一覽】北斎が『隅田川兩岸一覽』という浮世絵を描きますが、本なんです。全部カラーの印刷ででき上がっている本で、これの場合にも狂歌がここに入ります。これらが「狂歌絵本」と呼ばれているものです。

【新美人合自筆鏡】絵師は北尾政演、またの名を山東京伝という、作家ではあるんだけど浮世絵師でもあつて、そして商店の主人でもあるという人なんです。その山東京伝が自分で描いた浮世絵です。実任の遊女たちの姿を描いて、その絵のそばにそれぞれの遊女の文字を置いた。つまりこの人はこういう文字を書くのですよ、という一ページ一人構成で作られた遊女たちの本なんです。遊女たちがどんなに素晴らしい筆跡を持っていたかというのがこれでわかります。遊女たちはいい文字で手紙を書かなければなり

ませんので文章力、筆跡ともに実にいいものを持っています。

【葦手文字】これは箱です。箱の蓋に文字が書かれているのです。これは葦手文字といひまして、絵の中に文字が隠れているんです。徳川時代の工芸品である蒔絵の中でも、一体化された文字と絵が使われました。

【半纏の文字】これは半纏です。皆さんよくご存じだと思いますが、半纏の背中に文字がデザインされるようになります。半纏その他、着るものの中に文字が入っている事例は、大変な量があつて紹介できませんでした。

次にパロディというお話をしたいと思います。『邯鄲』のパロディ『金々先生栄花夢』は黄表紙になりました。パロディがたくさん使われているということは、今までも随分紹介したと思ひますけれども、さらにそれを見ていきたいと思ひます。

【仏涅槃図】よく見かける仏涅槃図ですね。仏様が亡くなつた日、世界中から人間も集まつてくるし、動物たちも集まつてくる。たくさんの動物がここにいますね。世界の生き物が集まつてきて、仏様の死を嘆き悲しんでいる、という絵です。

【業平涅槃図】在原業平が死んだんですね。そうしたら

世界中の女性たちが集まってきてしまった。嘆き悲しんでいるんですが、なんと動物たちも集まってきている。きつとみんな離でしょう。神様まで集まってきています。これは業平涅槃図と言いまして、涅槃図パロディです。

【果蔬涅槃図】大根が死んだんです。そうしたら野菜が集まってきちゃって、みんなが大根の死を悲しんでいるという絵なんです。ほとんどこうなると意味がないんですけど、でも涅槃図にすると意味が出てきてしまう、というところが不思議なところですね。実際には涅槃図というよりも野菜の尽し絵と言っていていいわけです。とにかく野菜を描きたいと思った時に、大根を真ん中に置けば涅槃図になるから、多種多様な野菜が無秩序にここにあつたとしても、不思議ではなくなるわけですね。こういうふうには構図が決まっていれば、尽くしができる。江戸の人たちは、「もの尽くし」が好きです。絵画だけではなく、文学にも非常にたくさん、名前を並べて楽しむということが行われています。

『果蔬涅槃図』を描いたのは伊藤若冲です。若冲は八百屋さんなんです。正確に言うとう京都の青物問屋なんですけれども、実際には若冲の描く絵は野菜は珍しくて、ほとんど鶏を描きますね。

【金々先生栄花夢】これは先ほど言いました。『金々先生

栄花夢』の別の部分です。『邯鄲』という物語を一つのシーンで表現しなさい、と言われた時には、大抵江戸ではこのシーンになるんですね。つまりどこかにお餅を掲いでいる画面を入れる。そばで金々先生が寝ている。そうすると夢を見る。江戸時代で注意しなければならぬのは、どこで夢を見るのか、ということ。必ず首で夢を見ているんです。首の後ろから吹き出しが出るんです。せりふではなくて夢を表現する時に、江戸時代では吹き出しを使うんです。この夢は、全く理由がなく突然誰かが迎えに来て金持ちの養子になっちゃった、という夢なんです。

【見立邯鄲】そうすると、他のパロディのやりかたも出現します。歌麿です。遊女が転寝をしている。夢を見ている。やはり首から夢を見まして、お迎えが来ていいところの奥様になっちゃった。遊女はそういう夢を見るものなんです。その夢を見ている遊女の部屋に一枚の絵が飾られていて、それが本物の邯鄲なんです。邯鄲が皇帝に上りつめる絵です。ですから、邯鄲のストーリーをシーンとして表現するためには、この一シーンだけあればいい、ということになります。

【葦葉遠磨】これは春信の描いた遠磨です。遠磨の場合にはこのシーンがあればいい。水があつて、葦の葉があつて、葦の葉の上に乗れるはずがないんですが、乗っている。



そして赤いものを着ている。この要素が揃えば皆さんすぐに達磨のパロディ絵が描けます。このシーンは、インドから中国に來た時の達磨の姿です。

【無益委記】これは何枚かお見せしますが、そういうようなやり方で、江戸では非常にたくさんのパロディが作られました。その一つです。恋川春町という、『金々先生榮花夢』を描いた人の絵です。これは聖徳太子が『未來記』という本を作った、という。これも伝説なんです。未來についての本である、ということがまず下敷きにあります。で、無駄な未來記ということで『無益委記』という本を作ったんですね。將來の予測をする。また魚屋さんが出てくるんです。魚屋さんは將來こうなる。江戸の人たちは初めの好きでみんな初鰯を買うようになる。そうすると、もっと早く、ということ。五月から四月、三月、二月、一月となり、とうとう十二月の末に鰯を売り出すようになる。それとともに金額がどんどん上がっていつて、八八〇兩ぐらいの金額になったので、樽に小判がぎくぎくと入ってます。重いので天秤棒が下に反るはずなのに、景気が良すぎて上に反っている。

こちらの男の人たちはすごく変な格好をしています。男性のファッションについての予想図です。当時の男性のヘアスタイルは本田髷といいまして、とても細い、鼠の尻尾

のように細い髷を、後ろの方に長く伸ばすんです。このままいくところなるよ、と。ほとんど釣り竿のようなヘアスタイルになっていきますよ、という予想図です。また当時の男の人の羽織の紐がどんどん長くなっていきました。もっと長くなっていくと、輪っかになりますよ、と。羽織も長いのが流行り始めました。もうちよつと長くなるともう引き摺りますよ、と。男の人の帯も幅広になっていつて、もうこうなると襟みたいになりますよ、と。歩いているとだるくてしょうがないから、誰か迎えに來ないかなあ、なんて言っているところなんです。

当時、鼠色がとても流行ったんですね。洗い張り屋さん、つまり染物屋さん、鼠色に染めてくれ、というお客さんが来る。「鼠色に染めてくれ」というのを、「鼠に染めてくれ」と言う。言葉どおり、鼠を持ち込んでいる。洗い張り屋も、巨大な鼠を開きにして染めている。また染め上がった鼠を、紙に包んである。駄洒落を絵にしたものです。

女が強くなる、という予想図がありました。女が強くなると、遊郭では男女がすべて入れ替わる。遊女は遊男になるんです。何故かヘアスタイルだけは男のままなんです。男の人が遊女していて、禿さんは本当はおかつばなんです。男の子になる。やり手のおばさんはおじさんになります。それを助ける若い衆は女の人になり、お客さんはすべ

て不良少女みたいな人たちです。お茶屋の女房が男房になる。というふうには男女が逆転します。

高齢化社会がやってくる、という図です。遊ぶ場所に行くとお年寄りばかりになります。部屋にはいろいろ所帯じみたものが置かれるようになる。

家に帰ると若者は引き篋もついています。炬燵に入つて猫かなんか抱きながら、コンピューターのように、本を立てかけて読んでいる。未来予想なんです、本当に当たりましたね。

【孔子縞子時藍染】一種の未来予想です。素晴らしい世の中が来る。孔子が『論語』でこういう世の中になつたらいい、と考えた世の中が実現してしまつたのです。山東京伝が書きました。お店に行くと「大高売りをします」と書いてある。安売りをしないで、高く売るのがサービスになる。高く売らないとお客さんが買ってくれなくなります。お客さんがお金を払いたくしょうがなくなる。これは質屋さんなんです、質屋さんに物を持っていき、そんなに払つてくれるな、とお客さんの方が文句を言つてるところなんです。

これは長屋の店子たちが大家に掛け合つてるところなんです、私たちのところに子どもたちがお金を投げ込んでしようがないという、お金がどんどん貯まつちやつてし

ようがないからどうにかしてくれ、と言つてるところです。また、家賃が安いじゃないか、もつと取つてくれなきゃ困る、と詰め寄つてるところです。

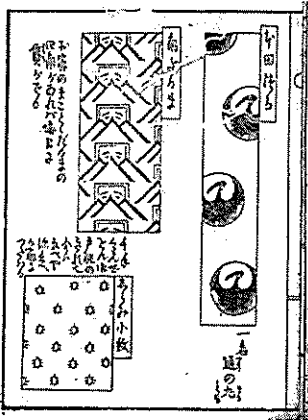
当時追い剥ぎつてとても多かつたんです。しかし追い剥ぎが出るころに行くと、追い剥ぎがれが出ちやつて、自分で着物を脱いで押し付けて逃げちゃうんです。そういう世界が実現される。

【玉磨青砥銭】今のは孔子の世の中なんです、こちらは寛政の改革をからかつた黄表紙です。松平定信は真面目な人で、都市の中であんまり楽しいことが起こつちやいない、と取り締まりました。その世の中がもつと進むとどうなるかという予想です。あまりに人気があるので、相撲が禁止になり、相撲取りがすべて駕籠かきにされる。劇場が閉じられ、役者たちは全て田舎にやられる。遊郭がなくなり、遊女たちは汐波みに派遣される。役者たちは田舎で田植えをしなきゃならない。しようがないから田植えをするんですが、調子が出ないので後ろで三味線弾いてくれ、という場面です。都会的な三味線に合わせて田植えをやつてるところが、なんともおかしいのです。

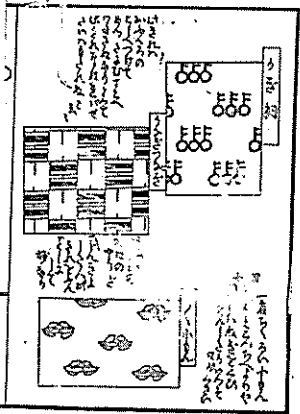
【腹筋逢夢石】これもパロディとして描かれたものです。中国演劇はよく動物が登場します。もちろん人間が動物になるわけです。そのパロディです。私たちも動物の真似を

してみましよう、お座敷芸でやってみませんか、という奇妙な本です。蛇になりたい時には、それらしい帯を持ってきて背中いっぱいいたらす。紙縫りを口にくわえればいいのではないかと、言うのですが、しかしお腹が出ています、普通の蛇には見えない。その場合には「蛙を飲み込んだ蛇にしろ」と書いてあります。

【和唐珍解】先ほどの、絵を見せる本とともに、日本の本は非常にたくさんルビを使いました。これはそのルビをパロディにしたものなんです。洒落本のパロディでもあるんです。遊郭に上がったお客さんたちが会話をしている状況をそのまま描くというのが洒落本なんです。これは鄭成功という、『国姓爺合戦』の国姓爺・鄭成功が家来達と一緒に長崎の丸山遊郭に来た場面なんです。中国人の喋っているところは中国語で書いて、日本人が話しているところは日本語で書いてある。中国語で書いてあるところは、全部右にカタカナのルビが、当時の南方中国語でふつてあります。ニンモンコウホイキユイ。このまま読むとちゃんと中国語がしゃべれるんです。左側にひらがなで「汝等は帰れ、帰れ」と書いてある。左ルビで翻訳してあるんです。本当にこういう本がありました。中国から入ってくる小説をこ



しらみ小紋・本田つる他



うなぎつなぎ・口々小もん他  
(近代デジタルライブラリー)

うやつて、左側のルビで翻訳して右側のルビで音読みをさせる、そういう本があつて、これを見ても当時の日本が活字を使えなかった理由がわかってくるんです。ルビをつけ、一つの文字に対する情報量を多くする。三倍の情報量がここにあるわけですが、そういう構成をする本がとてめたくさん出されてきました。

【小紋雅話】着物の見本帳のパロディです。着物の見本帳までどうしてパロディにしなければいけないのかと思います。はぎれを一枚一枚くつつけているように見せているんですが、これは印刷してあるんです。うちの店にはこういう反物があつて、これで着物を作りますよ、という前提で成り立っているんですね。例えば虱小紋で着物を作りましょう、と言われても作りたくはありませんが。

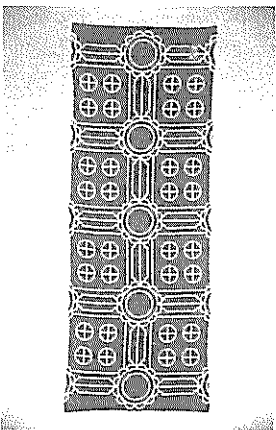
本田鶴という布はどうですか、と。これは鶴の絵でよさそうですよね。ところが本田鶴の本田、というところに当

時の江戸の人は注目してしまいます。本田というのは男の人の髷の名前なんです。本田髷というんです。それでわかりましたね。男の人の頭の上です。何人も男の人が歩いているところを上から見た柄になっているんです。ヘアスタイルそのものが鶴のマークになっていた、ということがこれでわかります。これで着物作りましようか、と言われなくてもやっぱり作りたくないような模様ですね。

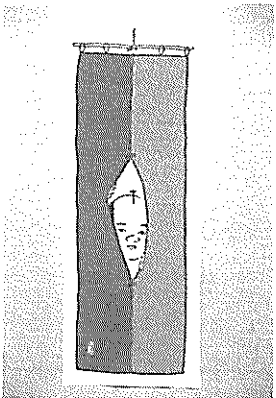
隈取の模様、これはありそうな気がしますね。それとかかるたをやっているところ。また「うなぎつなぎ」というウナギの蒲焼き文様。これを着ると精力がつくと書いてあります。「口々小もん」というのはキスシーン文様です。「なべぶたつなぎ」と書いてあって、お鍋の蓋だとわかりますが、でもなんでちよろちよろと出ているのかなあ？と注目してしまうんですが、実は「地、ねずみにそめてよし」とここに書いてあって、「あ、これは鼠なのか」とここで気がつくわけなんです。で、なんでこの状態になっているのか、と想像してみてください。台所で料理をしていたら、足元に鼠が出てきました。これは江戸時代ではよくあることですよ。あつと思つて、思わず鍋の蓋を取つて押さえたんです、という模様です。で、次どうします？その後。皆さんだつたら？そのま

まぎゅつと押したら潰れて汚いでしょ？でも力を抜くと逃げちゃうでしょ？どうしたらいいかわからない、という状態がそのまま模様になっている。というように、こういう本を出してしまう、というところがすごいですよね。

「たなくひあわせ」手ぬぐいです。これは何でしょう？この手ぬぐいのデザインを見るとそうか！と思うんですが、江戸時代の人たちのデザイン感覚というのは、実は日常生活のどんなものでもデザインになるのだ、ということをお話えてくれるんですね。「道成寺」という名前がついています。鐘ですよ。鐘にぐつと近づくとこういうデザインになる。なるほど、極端に近づくとデザインなのか、と思います。確かにそうですね。今でもこれは、浅草のふじ屋という手ぬぐい屋さんで売っています。これは「たなくひあわせ」というイベントが江戸時代に催されて、その時に歌麿の他のいろいろな人たちがデザインを出したんですね。そのシ



道成寺



【たなくひあわせ】

リーズが本になって、記録になって残っています。その記憶から起こして、浅草のふじ屋さんという手ぬぐい屋さんが一揃い、出しています。

これも手ぬぐいなんですよ。その時に出されたものです。素晴らしいデザインですね。何でしょうね？鯨です。目一つだけ描いている。これもぐつと鯨に近づいていますね。近づくと鯨もこんなデザインになる。見事です。

これは何でしょう？今の人はもうわからないかもしれません。私が子どもの頃にはまだありました。お釜です。お釜の一部です。これも近づくといいデザインになる。

これは山東京伝がデザインしたといわれている、実際の時に出品されたものです。これは鯨目といまして、歌舞伎の舞台の袖のところから、観客席の様子を見るための、幕にあげた穴なんです。観客席を覗いている、つまり我々が今覗かれています。この、覗いている顔なんです、これは山東京伝が後に、自画像として使うようになった顔なんです。山東京伝って本当はとってもハンサムな人なんですけど。自画像として表現される時は必ずこの顔で登場します。この顔をもったキャラクターは「艶次郎」といいます。

日本は非常に早くから物語が発達します。平安時代では、

物語文学が確立し、ほぼ完成します。江戸時代はそれらの物語を使って、さまざまなデザインを作り出しました。例えば『伊勢物語』の八橋が櫛のデザインになりました。また刀の柄にデザインされました。こんなに小さいところに物語を入れちゃうんです。硯箱にもなりました。同じ伊勢物語の八橋の出でるところ、宇津山の情景、山の中の情景ですね。宇津の山の田舎道をそのままデザインして刀の柄にしました。

また孟子の逸話は煙草入れになりました。表金具は孟子のお母さんです。孟子が勉強途中で帰ってきたら、お母さんが「勉強の途中で帰ってくるということはこうなることだよ」と、それまで織っていた布を鋏で切っちゃった、という状況をデザインしてあります。

ここからは着物の話です。

今までいろいろなパロディを含めてお話ししました。着物の中にも文字やパロディがあるということがおわかりになったと思います。ところで、着物はとても日本的なもの、という考えが私たちにありますね。でも実際に庶民が着ている着物を見てみると、大変外国からの影響を強く受けています。例えばこの絵。私はこの絵をよくお見せしていますがそれはこの文字を見せたいからなんです。『誂織当

世島」と書いてあります。「注文で作る今流行りの縞ものだよ」という意味です。後ろの緋縞を売るための呉服屋さんの宣伝用のチラシです。縞、ストライプの着物の宣伝に「島」の文字を使っていますね。これが江戸時代の「しま」の表記です。これは島々からやってきたもの、という意味です。つまり東南アジアやインドのことを指します。実際にこれがそういうところからやってきた。これは一八四〇年代の浮世絵です。この人が手に持っているのは当時瀬戸物と呼ばれ始めたものです。つまり江戸で十九世紀になってようやくこの瀬戸物が広がるんですね。染め付けの瀬戸物が広がるんです。そういう流行り始めたものを持っています。このお皿の中にあるのは金魚です。でもお腹が白くて平らなのに気が付きませんか？本物の金魚じゃありませんね。砂糖なんです。砂糖のお菓子です。砂糖というのはやはりインドネシアから輸入していたものを次に琉球から輸入して、次に国産に移ってそして広まっていた。それを表現しています。染め付け磁器もそうですよね。朝鮮から技術を持ってきて国産化して広めたものです。つまりこの中にはそのように、インドやインドネシアや琉球や朝鮮の技術を持ってきて日本化したものが入っているのです。

【役者・中村竹三郎の着ているアジアの縞縞】オランダ東インド会社がインドから運んできたものを役者が着てい

る姿も描かれました。しかしそれが鈴木春信の時代になりますと、浮世絵の中に突然、非常にたくさんさんの縞物の着物が出てくるようになります。つまり国産化が終わったということを示しています。

【北尾重政「東西南北の美人」深川の芸者】更紗、つまりパティックも同様です。深川の芸者さんがインドもしくはインドネシアで作られたパティックを帯にして、ヨーロッパで作られたピロッドを襟につけています。そういう姿です。この深川の芸者さんたちが輸入品で身を飾っていたのがわかります。

【国芳「誠忠義士肖像」忠臣蔵討ち入りの時の火消し羽織】そして今のパティックの山型模様が、これは忠臣蔵の絵だとおわかりでしょうが、忠臣蔵が舞台上に上った時に、定火消しの衣装として着られます。そしてやがて新撰組の衣装になります。元はインドです。

【鳥居清長「吾妻橋下の涼船」に見られる唐草の帯】そして女の人が帯にしていますが、これはおそらく和更紗。つまりインド更紗を大量に輸入した後で、それを日本化して和更紗というものを作ります。

駆け足で来てしまいましたが、着物の中でも最も庶民的な着物である縞や更紗には、そういうインドやインドネシアなど東南アジアの影響が見られます。江戸時代はそうや

って見てきますと、日本の歴史の中で最もインドの影響を強く受けている時代です。これは庶民文化の中を見てみるとなかなかわからないことなんです。しかしそれでもですね、日本の着物は冒頭でも申し上げましたように、世界には存在しないことを実現しました。それが七つ目の「着物の中に風景を入れてしまった」ということなんです。

【屋内の御簾から見た庭の風景の着物】これは御簾を上げて庭を見ているんです。庭に秋の花が咲いているんですね。これはすべて刺繍で表現しているんですが、非常にリアルなんです。博物図鑑を見ているようです。

【拡大図】これは近づいた状態です。刺繍です。一針一針刺しているんです。例えば、風景の中に入れるというのは大ざっぱに入れるのではなくて、こういった本物の草花に近いものを着物の中に実現する、ということがおこっていました。

【吉原細見の着物】これは友禅染です。遊郭の風景を描いています。

【拡大図】近づいてみると、一人一人歩いていて、建物の中の様子が見えて、建物の中の人間や調度類が見えるんですね。これは染物です。

着物は、広げた時に一枚の風景画になります。私たちは見慣れているので「ああそういうものか」と思ってしまっ

ていますが、全世界探してもそういうものはないんです。ですから一方で中国やインドからいろんなものを取り入れると同時に、どこにもないものを作り出したということがあります。

【山桜に鶯と流水の着物】これは山の中に桜が咲いていて、鶯が流れに沿って泳いでいるのですが、流れが手前側にきますので、自分が流れの中にいるような気がします。この流れの線は絞りで作っています。鶯の羽一羽はすべて刺繍です。

これは夕暮れの山の中の風景です。桜が咲いていて、山道です。これも刺繍です。拡大してみると草花も大変リアルに刺繍されています。

【竹林の着物】竹林です。竹の一本一本をすべて、一点絞りで出しています。竹の葉はすべて刺繍です。拡大してみると竹林の中に入った気分です。すべて絞りだということがわかります。

【嵐山の着物】これは染めです。京都の渡月橋のところですね。裾のところに陸地があつて、そこを歩いているような描き方をしています。

これら一点一点の着物の絵は、近づいて見ると非常に詳細に描かれていて、遠くから見ると実際の風景に見える。このようなものを実際に身にまとっていたこと自体が驚き

なんです、それが江戸時代を作ってきた職人たちのレベルなんです。先ほど縞の時にお話ししました。江戸時代の文化は、外から取り入れながら国産を作り上げてきた文化だと申し上げましたが、国の中で、外に商品を出したり、輸入するだけでまかなうのではなく、輸入しながらそれを自分たちのものにしていく過程で、非常に多くの職人さんたちが育ったんです。その職人さんたちが、今の日本に至るまでの技術、つまり近代に至るまでの技術を二七〇年間育ててきたんですね。それはいろいろな分野の職人さんに共通して言えることなんです、私はそのことを考えると今おこっていることはちょうどそれと逆で、何百年もかかって作り上げてきたその技術を、「空洞化」つまり、外に出してしまっていますね。安いから、というそれだけの理由です。安いから外で作らせましょう。それで日本の工場がどんどん潰れています。おそらくこれが続いて、空洞化がそのまま進んでいったら、江戸時代の職人さんとその後を受け継いだ近代工業の職人さんたちが日本からいなくなっていくって、四〇〇年間作り上げてきた日本の技術が消滅します。今、日本はそういうところにきています。技術を育ててきたのは江戸時代です。これはもつと歴史的に説明いたしますと、長くなってしまいますので止めますけれども、日本の江戸時代は何故「鎖国だ」というふうに言っている

けないのかと申しますと、江戸時代に入る手前でもうすでにグローバリズムがおこっているんですね。つまり地球が一体化していく。一体化した地球の中に世界商品が流れ始める。この最初の世界商品は銀です。日本から大量の銀が外に向かつて放出されました。日本は一時は銀の産出、輸出国として世界一位だったんです。そしてその銀をどんどん支払って、外国の技術で作ったものを買っていたんです。当時のハイテク国家は中国とインドですから、そこからたくさんのもので買っていた。そういう時代が秀吉の時代で終わります。そして江戸時代に入ります。ですから江戸時代というのは最初から、それができない時代なんです。お金を払って良いものを買う、これができなくなつた時代なんです。できなくなつた、というところから出発しますから、そうしますと、情報を入れるけれども、自分たちで作ろうということになります。人に作らせて買うのではなく、自分たちで作る。自分たちで作ろうと思っただけで職人さんが育ったんです。作ったものをいろいろな方法で国内需要を活性化させて、生活を豊かにしていったんです。この時に、ではどうして商品を買ったか、というその秘密が先ほど皆さんに申し上げた「元」というものがある、ということ。古典も使える、中国も使える、いろんなものを使える、いろんなものを使って次々と新しい商品



作り出していく。もう新しいものはないんじゃないか、とぼかんとしているのではなくて、「元」つまり伝統さえあれば新しいものはいくらでも作れる、というのが江戸の人たちの考え方なんです。そういう意味での想像力というのはものすごく強かったと思っています。

私はそういう江戸時代を、できるだけ地球規模で眺めながら、どうして江戸時代という時代があつて、あれほどいろいろなものを生み出していったのか、考えようとしています。文化と商品というのは一緒になっていますので、文化だけ見ようというのは無理なんです。やはり庶民一人一人が毎日何を使っているのか、その使ったものをどうしているのか、そういうようなことから江戸文化はたくさんものが見えるのではないか、と思っています。芸術だけ見るのではなく、やはり「暮らしている」という中で、あの素晴らしいデザイン感覚とか、ユーモアの感覚とか、そういうものを含めた江戸文化を、私はこれからも見ていきたいと思っています。